

土作りのポイント

10月に入り、少しずつ気温も低下し、肌寒い季節となりました。これから冬の休閑期に入ると、空き畑が多くなります。来年に備え、土づくりをしましょう。

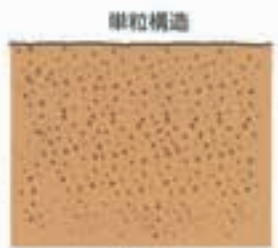
- 野菜の根が健全に伸びるには
- (1) 水はけと通気性が良いこと
 - (2) 水持ち(保水力)が良いことが重要な条件となります。

土には細粒の粘土と、粗粒の砂の割合が異なる団粒構造と単粒構造があり(図参照)、団粒構造にすると孔隙率が高く、空気や水を適度に含み根がよく伸びますが、その状態も数年野菜を作り続けると、痩せて単粒構造となり、孔隙(隙間)が少なくなり根があまり伸びなくなってしまう。

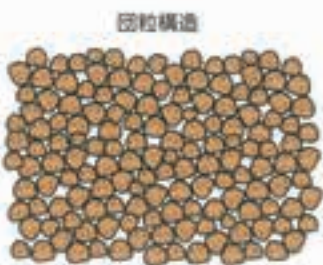
土を団粒構造にするには、良い粗大有機物(堆肥、緑肥、ピートモス、ココピートなど)を十分に施し、深く耕すことが必要です。

根が深く広く張るためには深層まで条件を整えることが大切ですが、その目安として、直径8〜9mmの棒を畑の土に挿した時、あまり力を入れずに入る作土層が20cm以上あることです。力いっぱい挿し込んで測る有効土層が60cm以上あれば、申し分ありません。

畑起こし、粗大有機物入れの時期



空気や水が入り込む孔隙(隙間)が少なく作物の根がよく伸びない



有機質を入れると、空気や水を適度に含むことができ、よく生育できる



は寒冷の冬が最適です。それは、他の作業が少なく、畑が空いていることだけでなく、掘り起こした下層の土を厳しい寒気にさらし風化させることにより物理性が改善され、病原菌や害虫、雑草の種子を死滅、軽減する効果が大きく発揮されるからです。

作業の手順としては、前作の残りがすや病害虫の被害株・残根などをきれいに取り除き、堆肥などの粗大有機物を畑全面にばらまいてから耕運します。深耕する場合には先に畑起こしをしてから、次の耕運時に

堆肥などの粗大有機物を施すのが良法です。耕した土はなるべく表面に凹凸があるままにしておき、寒気に触れる面を大きくしておきます。

土壌の酸性度も冬の間に調べてpH 6.0〜6.5程度に調整しておくことが大切です。酸性を改良する消石灰の施肥量は砂質あるいは腐食の少ない土壌では少なくてよく、黒ボク土では多くを要するので、施用量を誤らないようにすることも大切です。毎年むやみに与え過ぎると弊害を生じる恐れがあります。